



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	インド再訪その1 : 中央インド・ボーパール編
Author(s)	森, 傑
Citation	センターリポート, 54(4), 24-25
Issue Date	2025-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94100
Type	journal article
File Information	Cent Repo.231.24-25.pdf





インド再訪 その1

～中央インド・ボーパール編～

森 傑

北海道大学大学院工学研究院・教授

1. はじめに

2024年9月、おおよそ30年ぶりにインドを訪問した。前は私が学部2年生の時、有名どころとしてはエローラとアジャンターの石窟群を訪れた。特にエローラ石窟群は、石を積み上げた建築にはない、石を削った建築がもつ特有の重力感のズレに衝撃を受けた。当たり前だが、当時の私は重力に逆らってどのように建てるのかという構造力学を学んでいた。エローラの石窟は“見た目”は仏教やヒンドゥー教などの寺院様式どおりであるが、体感する空間は通常の地面の上に立てられた建築とは異なるある種の不安定さがあった。日本の柱に慣れていると外国の柱が細く感じて心配になるあの感覚に近いかもしれない。ともあれ、それが前回のインドで、30年以上前である。

2. SPA Bhopal

「インド再訪 その1」の本稿では、ボーパール(Bhopal)での滞在を紹介したい。読者の多くが初めて聞く都市名ではないだろうか。インド中部のマディヤ・プラデーシュ州の州都で、旅行ガイドブックにも掲載されているが、日本での認知度は高くないだろう。18世紀からインド独立までのイギリス統治下ではボーパール藩王国として栄え、その間の約100年間は4人の女性藩王により治められていた。現在のボーパールの人口は約250万人で札幌よりも多いが、今や中国を抜いて人口世界一となったインド国内においては決して大きな都市ではない。

School of Planning and Architecture Bhopal のRachna Khare 教授の招きで講演させていただいた後、学部生・院生のポスターセッションに参加させてもらった(写真1)。建築分野だけでなくプロダクトデザインや交通計画などから60～70の展示があった。われ先にと手を挙げて猛アピールする学生のハングリーさに圧倒されたが、日本の(少なくとも筆者の勤務先の)学生にもこれくらいの積極性が欲しいものだ。

3. サーンチー仏教建築

サーンチー(Sanchi)は、ボーパールから車で約1時間30分の小さな町である。約30年前はインドの首



写真1 SPA Bhopal での学生とのセッション



写真2 道の真ん中に寝そべる牛

都デリーでも普通に道の真ん中で牛が歩いていたり寝そべっていたりしたが、今の都心部では見かけることは少ない。サーンチーへの道中ではそのような懐かしい風景に出会うことができた(写真2)。

サーンチーのストゥーパや僧院などは1818年に発見されたインド最古の仏教建築で、1989年にユネスコ世界遺産として登録された。最初に筆者の目を引いたのは、紀元前2世紀に建てられたストゥーパ第3塔である(写真3)。歴史・様式云々を抜きに形態としてのプロポーションとしての美しさを感じた。

インドのストゥーパは覆鉢塔形式が基本で、平らな頂上に箱形の平頭を置き、傘蓋を立てる。半球形の覆鉢を巻くように円形の基壇があり、その周囲に欄楯を巡らし四方に門を開く。信者は欄楯の内側を時計回りに歩いてストゥーパを礼拝した。

最も大きいのはストゥーパ第1塔で、紀元前3世紀にアショカ王が建立した煉瓦積み塔を下地に、古塔を内部に包み込んで増広されたものである。1世紀初期の姿がほぼ残されている(写真4)。覆鉢は直



写真3 サンチーの美しい第3塔



写真4 大ストゥーパ第1塔



図1 第1塔の平面・立面



写真5 Bharat Bhawanのアプローチ



写真6 Bharat Bhawanのコートヤード

径約36.6m、高さ約16.5m。欄楯は二重になっており、四方の塔門（トーラナ）の入り口はクランクして、上から見ると卍の形となっている（図1）。

4. Bharat Bhawan

サンチーから2千年後のボーパールの建築を一つ紹介したい。Bharat Bhawan マルチ・アート・センターは、言語芸術・視覚芸術・舞台芸術のインタラクティブな関わりを築くことを目的として、インド初の女性首相インディラ・ガンディーにより1982年に開設された。ちなみに、首都デリーの国際空港の名称は彼女に由来している。Bharat Bhawan は展示空間だけでなく、美術・文学・演劇・映画・ダンス・音楽などの芸術活動のためのスペースも提供している。

設計はチャールズ・コレア（Charles Correa, 1930-2015）。チャールズ・コレアは第6回高松宮殿下記念世界文化賞（1994）を受賞しており、彼の他界は日本のメディアでも報じられた。

ボーパールの Upper Lake に面した小高い丘に、湖に向かって緩やかに流れていくテラスガーデンが広がる（写真5）。エントランスからの視界には建築のボリュームはなく、湖を感じながら公園を歩いて行くと、いくつかのコートヤードをつなぐかたちの展示室や活動室へと自然に導かれる（写真6）。インドの伝統的住宅形式の重要な要素であるコートヤード

ドを引用し、それを丘に埋め込んだランドスケープの創出がすばらしかった。チャールズ・コレアのこのような手法は、代表作であるジャイプールのジャワハル美術館（1992）にも通ずる。

5. おわりに

30年前のエローラなどに比べ、サンチーは非常に綺麗に整備され、遺跡の保全や管理も行き届いていた。

インドでは近年、公共空間のユニバーサルデザインの取り組みが進んでいる。それは非常に素晴らしいことだが、サンチーでの点字ブロックがやや残念だった（写真4）。インドでも普及している日本発祥の点字ブロックは黄色が原則だが、それはアスファルト舗装に対してコントラストが効くことが理由である。つまり、黄色自体に意味があるのではなく、視野に入る床の他の色や素材との見え方の違いが重要なのである。決して浅慮とは言わないが、明度や輝度の差のデザインはもっと工夫ができるはずだ。SPA Bhopal でのセッションでも、伝統的地区の修景プロジェクトで黄色の点字ブロックを雛形のように貼り付けている提案があり、同じような指摘をした。

今回はスケジュールに全くゆとりがなく十分な意見交換ができなかったが、SPA Bhopal での次の機会を楽しみにしたい。

